

シャッター通り商店街に活気を取り戻す

～多世代が集い交流する街づくりへの取り組み～

社会福祉法人 泰清会 **サンライズ港町**(広島県)

【取り組みの概要】

郊外型大型ショッピングセンターの出店、店舗の老朽化、店主の高齢化などにより、人通りが途絶えた中心市街地の商店街が全国的に問題になっている。しかし、そのいわゆる“シャッター通り商店街”に開設したケアハウスを拠点に、医療・福祉を中心とした街づくりに積極的に参画し、地域の活性化に貢献した例がある。広島県三原市にある社会福祉法人「泰清会」の経営する「サンライズ港町」である。

サンライズ港町は、三原市の中心市街地にある商店街の中の郵便局移転後の跡地利用において、三原市がケアハウスとしての利用を決めて公募をし、その事業を受けた泰清会が平成16年11月に開設した施設である。泰清会はさらに同じ商店街内に、内科を始めとする医療機関がテナントとして入った高齢者マンションをコーディネートし、その後もレストランや整形外科の入ったビル内に保育所、保育所の付帯事業としての地域子育て支援センターを次々に開設し運営している。他にも、市内各地域の特産物販売等を行う「さんさん土曜市」を始めとした各種イベントを企画している。

これら一連の取り組みにより、シャッター通り商店街に人の流れを取り戻した。高齢者から子どもまで、多様な年齢層が集う街づくりが実現しつつある。

泰清会が「帝人通り商店街」で展開する各種事業

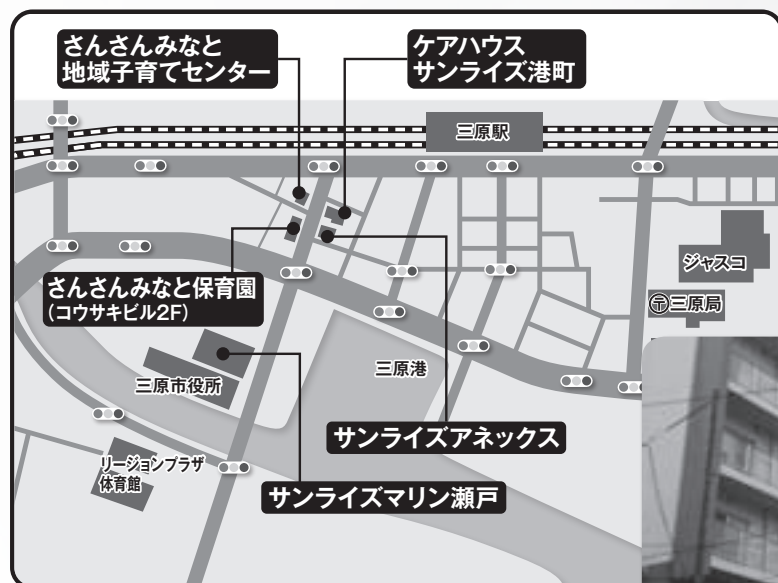
JR三原駅から歩いて約3分、三原港フェリーターミナルからも歩いて約3分の距離にある三原市の中心市街地に「帝人通り商店街」はある。その中に、鉄筋コンクリート6階建の「サンライズ港町」は平成16年11月にオープンした。ケアハウス、特定施設入居者生活介護、通所介護の3つの事業が展開されている複合施設である。2階に定員35名の通所介護事業所（デイサービスセンター）、3～6階が定員56名のケアハウスとなっており、内3階部分は特定施設入居者生活介護としてサービスを提供している（定員18名）。1階には地域交流スペース「サンサンひろば」がある。

3～6階の入居者の平均年齢は86.5歳、要介護度別の利用者数は、非該当者が8名、要支援1～2が15名、要介護1が4名、要介護2が14名、要介護3以上が15名である（平成22年3月末時点）。要介護度の高い利用者はほとんどが3階の特定施設の入所者である。開設当

初からほぼ満室で、入居待機者は200名を超えている。2階のデイサービスセンターは1日平均約30名の利用があり、稼働率は80%前後でここ数年は推移している。

帝人通り商店街には、泰清会が経営する事業所やコーディネートする施設が他にもある。サンライズ港町のすぐ南隣りには、平成17年4月にオープンした5階建の「サンライズアネックス」があり、そこでは居室数38の高齢者専用マンションを、当法人の関連機関（有限会社）が経営している。1階はクリニックモールとして、内科を始めとした多様な医療機関がテナントとなっている。向かいには、泰清会が平成19年4月に開設した定員60名の「さんさんみなと保育園」もある。保育所は建物の2階部分で、1階部分には和食レストランと整形外科、3階部分にはデイサービスセンターが入居している。この保育所のある建物のすぐ近くには、平成20年6月に保育所の付帯事業として、商店街の空き店舗を活用して開設した「さんさんみなと地域子育て支援センター」もある。（次頁 参照）

三原市中心市街地における泰清会の実施事業



サンライズ港町・サンライズアネックスの外観

帝人通り商店街の郵便局移転後 跡地利用としてのケアハウス計画

現在「サンライズ港町」の建つ帝人通り商店街は、昭和9年に操業した帝人三原工場とともに発展したエリアである。昭和30年のピーク時には従業員約7,000人を抱え、商店街も3つの映画館をはじめ80店舗におよぶ商店が軒を連ね、大きなにぎわいを見せていた。しかし、現在では工場の従業員数が約500人にまで縮小し、郊外型ショッピングセンター誕生の影響も受け、店舗数は半減した。シャッターが下りたまの店が増え、最盛期の面影はみじんも感じられない、いわゆる「シャッター通り商店街」へと衰退していった。

その中心地に位置していた郵便局が市街地の東部に移転し、跡地は約450坪の空き地となった。当初三原市はこの空き地を防災公園とする計画を立てたが、商店街の店主らからは「防災公園ではそこに日常的に人は集まらない。それ

では、商店街の活性化にはつながらない」と強い反対意見が出された。

ここで1つの転機が訪れる。平成14年に市長が交代したのである。新市長は商店街の店主らの要望を受け入れ、防災公園の計画を撤回した。そして、その空き地となった跡地の利用方法は、高齢者の住まいの場である福祉施設（ケアハウス）の建設と決まったのである。この利用方法の転換は、高齢化が進んでいた三原市における「医療・福祉の街づくり」の一環であったと考えられる。医療・福祉の街づくりの構想に合致し、人が多く集まり商店街の活性化により寄与するものは、福祉施設ではあるが住宅としての機能が強い「ケアハウス」であったのだ。

平成14年5月、三原市内の15の医療法人と社会福祉法人に公募（公募型の指名競争入札）がなされた。当時、中心市街地から離れた市内の山間部で特別養護老人ホームをはじめとした介護保険事業を運営していた社会福祉法人泰清会は、この公募に手を上げた。「三原市の高

齢化率（平成22年3月末時点で約28% ※人口は約10万人）や特別養護老人ホームへの入居待機者数からも、ケアを要する高齢者向けの住まいが不足していることは明らかでした。特別養護老人ホーム、ケアハウス、グループホーム、高齢者向け賃貸住宅・・・制度にあるなしに関係なく、住まいを提供するサービスを広げなかったのです。そう思っていた時に公募の話が来ました。迷わず手を上げましたよ」と泰清会の本井理事は振り返る。この公募に際し泰清会は、ケアハウス内に地域交流スペースを設けることを盛り込んだ内容で提案に臨み、その内容が評価されて翌6月に三原市から選定を受けた。当時、市町村共済組合が所有していたこの土地を三原市が買い上げ、平成15年10月に泰清会が同額で取得し、その後に建設に際しての補助金を得て整備することとなった。

サンライズ港町 および サンライズアネックスの開設

公募の結果を受け、泰清会は平成16年11月のオープンに向けて、ケアハウスの建設計画を進めていくことになった。整備にあたってはまず、提案にも盛り込んだ「地域交流スペース（※）」について、それを持つケアハウスを全国で探して視察した。幾つかの施設を視察したものの、どの施設も外から中がほとんど見えない構造となっており、せっかくの地域交流スペースが開放されていない印象を受けた。何をやっているか、どんな所かを外から分かるようにすれば入りやすくなると考え、道路に面した壁はガラス張りにすることにした。また、「サンサンひろば」という名称も、その存在を広く知ってもらうために公募により決定した。

※地域交流スペースは、現在サンライズ港町の1階に設けられ、市民誰もが申し込みをすれば無料で利用できる。加えて、建物外（敷地内）に市民の憩いの場としてウッドデッキ「さんさんガーデン」も設けている。

この地域交流スペースは、法人として「施設は地域に開かれるべき」との思いからの企画であったが、ケアハウスの建設を進めていく中で、さらに一步踏み込んだ「地域の活性化」についても次第に意識していくこととなる。「不足しているケアを要する高齢者の住まいを提供するサービスを広げることで、地域に貢献したい」との思いからの取り組みであったが、そもそも郵便局移転後の跡地利用で防災公園の計画が撤回された背景には、商店街の店主らからの「商店街の活性化につながる、人が集まるスペースにしてほしい」との要望があった。結果、医療・福祉の街づくりの一環としてのケアハウスの建設となったが、地元商店街や商工関係団体からの期待は大きかった。街づくりに関する会合に呼ばれることも増えていった。ゆえに、地域交流スペースを設けたケアハウスの視察の後は、「黒壁の街づくり」の滋賀県長浜市、「昭和の街づくり」の大分県豊後高田市といった、全国の街づくり事例の視察へとシフトすることとなった。

一方、三原市よりケアハウスの建設計画の選定先として指名を受けた直後の平成14年夏、建設予定地の南に隣接する建物の所有者から約250坪の土地の有効活用の相談を受けた。その建物は閉鎖したままの映画館であったが、平成13年の芸予地震の被害を受け、建物を解体しなければ危険な状態にあった。解体後、駐車場にしたところでは商店街の活性化にはつながらないだろうと考えた所有者は、建物を建てる資金は出すので、商店街のため、三原市中心市街地のためになるような事業を、建物を使ってしてくれないか、と持ちかけてきたのである。そこで、人を呼び込めるもので、経営のための安定した収入も見込めて、商店街の活性化にもつながり、建設の決まっているケアハウスとのコラボレーションもできるものは何か、と考えた

時、出てきた答えは医療機関の誘致であった。近所で開業している複数の病院・診療所を説得し、その結果、建物の1階はテナントとして内科、皮膚科、眼科、薬局が入るクリニックモールにした。建物の上層階部分（2～5階）には、高齢者向けマンション（居室数は38）をつくることにした。ケアを要する入居者には、訪問介護等の各種サービスを外から提供し、その生活を支える。1階の医療機関の存在も、入居者に安心をもたらす、というイメージがあった。

ケアハウスの建設もその間に着々と進み、オープン3か月前の平成16年8月には、56室すべての入居者が決定した。さらに10月下旬に行った見学会には、2日間で約2,000人もの見学者が集まり、見学者の列が敷地内はもとより道路にも延々と続く、という盛況ぶりであった。そして11月、「サンライズ港町」はオープンを迎えた。一方、隣接する高齢者向けマンションとクリニックモールが入る「サンライズアネックス」も翌年4月にオープンした。

「サンライズ港町」のもつ福祉機能、「サンライズアネックス」のもつ医療機能をそれぞれが共有する形で、入居者をサポートする体制が整った。なお、中心市街地にある商店街の中という利便性がものを言い、ケアハウス入居者の友人や家族の出入り、バスや徒歩で通われるデイサービスセンターの利用者、アネックス内の医療機関への受診者の数は予想を大きく上回り、商店街を日常的に往来する人の数も徐々に増えていった。

地域イベントの開催

「サンライズアネックス」が開設した平成17年4月は、三原市が周辺の3町（本郷町、

久井町、大和町）と合併し、新三原市が誕生した直後でもあった（平成17年3月に新三原市が誕生）。当時、三原市の街づくり担当の課長（元の福祉課長）が本井氏を訪れ、この合併を機会に商店街の活性化に向けたイベントができないかという話になった。本井氏は高知城の下に露天が並ぶ日曜市を思い出し、合併を記念して、近隣の町の野菜や果物、魚、漬け物など特産物を集めて販売することを提案した。この提案には課長も賛同し、横断的に動いて必要な各種手続きのサポートをしてくれた。後援団体には地元の大学と商工会議所も加わり、帝人通り商栄会（帝人通り商店街の店主らの組織）、三原市、そして泰清会の5団体共催で、「土曜市」を開くことになった。新三原市としての一体感を市内全域でもてるよう、各地区の伝統文化の紹介や各地域の物産販売を中心に、交流に主眼を置いたイベントとしての「さんさん土曜市」は、平成17年7月に記念すべき第1回目が開催された。その後、毎月第1土曜日に開催されることとなり、毎回約800人の市民でにぎわっている。

平成19年4月からは、サンライズ港町の1階地域交流スペースにおいて「さんさんシアター」を開催している。無料映画上映会として、さんさん土曜市とあわせて毎月第1土曜日に開催される。定員30名で誰でも鑑賞することが可能で、地元の企業などから賛助金を募り、上映作品はDVD管理会社から1作品あたり約3～4万円でレンタルしたものを上映している。

加えて、毎年12月に「クリスマスメモリアル」と題したイベントを開催している。市内にクリスマスイルミネーションの名所をつくりたいという発想から生まれたものである。クリスマスツリーを中心に華やかな電飾が彩られ、点灯式典には子どもから高齢者まで幅広い年齢層の市民約400人が

参加する。大学生によるクリスマスメドレーの演奏なども行われ、世代間交流の場として大変なにぎわいを見せている。

この「さんさん土曜日」、「さんさんシアター」、季節の風物詩となった「クリスマスメモリアル」のイベントは、地元の新聞やテレビなどのメディアでも多く取り上げられている。商店街に多くの人を集わせ、活性化を図る仕掛けは一定の成功をおさめている。

「さんさんみなと保育園」の開設

「サンライズアネックス」の事業が成功すると、今度はその向かいにあった駐車場のオーナーから、土地の有効活用についての相談が舞い込んだ。検討の結果、サンライズアネックス内のクリニックモールにはなかった整形外科、デイサービスセンター、そしてデイサービスセンターに必要な食事も扱う和食レストランを誘致することとなった。4階建を計画しているビルの1階にはレストランと整形外科、3階にはデイサービスセンターが入ることが決定し、課題は2階フロアをどう利用するかになった。その時、以前から手がけたいと思っていた保育所というアイデアが本井氏の頭に浮かんだ。第1回目のクリスマスメモリアルでのイルミネーションの点灯式典で、子どもたちとその親、大学生に高齢者と、さまざまな世代がそこに集い、世代間交流がなされる光景を目の当たりにし、心を打たれた思いが蘇ってきたのである。また、もしも子どもたちが病気や怪我をした場合でも、医療機関がすぐ近くにあるため、保育所という選択は適切と思われた。

開設にあたっては、ビルのテナントとしての認可保育所の先例はないとのこと

で、広島県との交渉は難航を極めた。園庭や登記について問題視されたのである。結果、園庭については商店街近くの70坪の土地を購入することを決めた。登記については、ビルの所有者が仮に倒産した場合、物件を抵当にしている地元銀行に所有権が移ることとなっている点が、何かあった場合に利用する子どもたちに影響が及ぶ、と問題視されたのである。しかし、銀行と粘り強く交渉した結果、仮に銀行所有となった場合も保育所は継続できる旨の確約をとり必要な手続きをし、なんとか広島県からの認可を得て、平成19年4月に「さんさんみなと保育園」の開設に漕ぎ着けたのである。定員は60名で、開所日は日曜祝日を除く月曜日から土曜日までの7時から18時（延長20時まで）とし、開設から半年で定員数を突破した。

翌年の平成20年6月には、小さな子どもをもつ親の支援、および親間の交流を図るため、商店街の空き店舗を利用して「さんさんみなと地域子育て支援センター」を開設した。センターは、月曜日から金曜日の10時から15時まで開所し、専属の保育士を2名配置している。子どもや親同士の交流の場として、また子育てに関する相談窓口やおむつ交換、授乳の場にもなっている。火曜日は「ふれあい遊び」と称し、地域の高齢者との交流の日としている。サンライズ港町やサンライズアネックスの入居者はもとより、地域の高齢者が気軽に立ち寄り、子どもたちと触れ合える場としている。開設当月の利用者数は延べ198人、1日あたり約9.4人を数え、商店街ではベビーカーを押した母親同士が談笑するという、以前では想像できないような光景が見られるようになった。

（次頁「沿革」参照）

社会福祉法人 泰清会 沿革

1998年7月15日(平成10年)	社会福祉法人 泰清会 設立
1999年12月6日(平成11年)	特別養護老人ホーム サンライズ大池【定員54名】 事業開始 サンライズ大池 短期入所生活介護事業所【定員16名】 事業開始 デイサービスセンター サンライズ大池 事業開始 ホームヘルパーステーション サンライズ大池 事業開始 サンライズ大池 居宅介護支援事業所 事業開始 ケアハウス サンライズ大池【定員19名】 事業開始 在宅介護支援センター サンライズ大池 事業開始
2003年10月4日(平成15年)	サンライズ大池 ホームヘルパー養成研修事業所 事業開始
2004年10月1日(平成16年)	サンライズ港町 居宅介護支援事業所 事業開始
2004年11月1日(平成16年)	ケアハウスサンライズ港町【定員56名】 事業開始 (内、特定施設入居者生活介護事業所【定員18名】) デイサービスセンター サンライズ港町 事業開始
2004年12月1日(平成16年)	サンライズフジ介護サポートセンター(居宅介護支援事業所) 事業開始
2005年4月1日(平成17年)	サンライズアネックス事業開始 ※関連機関(有限会社ワークス)による事業
2006年3月31日(平成18年)	在宅介護支援センター サンライズ大池 事業廃止
2007年4月1日(平成19年)	トータル・ケア サンライズ宮沖 事業開始 (小規模多機能型居宅介護事業所【登録定員25名】、居宅介護支援事業所) さんさんみなと保育園(認可保育園)【定員60名】 事業開始
2008年6月1日(平成20年)	さんさんみなと地域子育て支援センター 事業開始
2008年12月31日(平成20年)	サンライズフジ介護サポートセンター(居宅介護支援事業所) 事業廃止
2009年6月1日(平成21年)	トータル・ケア サンライズ新倉 事業開始 (小規模多機能型居宅介護事業所【登録定員25名】、高齢者専用賃貸住宅【定員12名】)
2009年10月1日(平成21年)	トータル・ケア サンライズ宮浦 事業開始 (小規模多機能型居宅介護事業所【登録定員25名】、高齢者専用賃貸住宅【定員19名】)

取り組みにつながった法人の姿勢

商店街の跡地利用としてのケアハウスの公募に手を上げたことが取り組みの始まりであるが、ケアハウス開設後の周辺事業への進出やイベントの開催といった地域に向けた各種の取り組みについては、いずれも「周囲からの要請に対して迅速に対応してそれを形にしてきた」点が共通している。そこには、次のような法人の姿勢が根底にある。

①想いを形にする行動力

ケアハウスに隣接したビルの有効活用にしても、新三原市の誕生にあわせた地域イベン

ト(「さんさん土曜市」等)にしても、先の見えたレールが敷かれていたわけではない。行政や地元商工関係団体のある程度の協力はあったにせよ、アイデアを練り上げ、周囲と調整し、実行していく過程においては、泰清会自身がかなりの部分で主体的に行動している。

特に、ビルのスペース活用での保育所開設に向けては、当初は所有権の問題もあり、行政の理解を得るまでの壁は大きかった。それも、粘り強い行動と交渉の末に乗り越えている。法人として「こうしよう」と決めたことを形にする強い行動力がそこには垣間見られる。

②自法人のできることを模索する姿勢

行動力があっても、やみくもに行動しただ

けでは成果は上がらない。与えられた課題に対して、法人として何ができるかを考え抜く過程が欠かせない。ケアハウス開設以降の周辺ビルの跡地利用にしても、「地域活性化につながるためには何をすれば良いか」を検討すると同時に、「法人の有する資源で何ができるか」、「法人の実施している事業といかに関係付けるか」という視点をもって検討した結果であった。

地域の実情に目を向ける姿勢、周囲からの提案・要望を聞き入れる姿勢に加えて、自法人の有する資源をいかに活用するかを自問しできることを模索する姿勢を持ち合わせていたことが大きかった。

③状況に応じて取り組みを進める柔軟性

前出のとおり、泰清会がケアハウスの公募に手を上げたのは、法人として事業を拡大するチャンスであったことは勿論のこと、地域に不足しているケアを要する高齢者の住まいのサービスを増やしたいという思いからであった。そこに「地域の活性化に寄与したい」という思いが芽生えてきたのは、開設準備中にかけられた周囲からの期待に始まり、平成16年11月の「サンライズ港町」と翌4月の「サンライズアネックス」の開設、その後の「さんさん土曜日」等の地域イベントの開催で、多くの市民がそこに集った活気のある光景を目の当たりにしたからである。

「高齢者の住まいのサービスを増やす」という当初の目的に向かって進むなかで、街づくりを通した中心市街地の活性化にも法人として寄与できると考えてからは、積極的に法人の資源を活用しその取り組みを進めていった。状況に応じて地域に対してできることを広げていった柔軟性をもった経営判断と実行力が示されたといえる。

「職員には、『自法人の特別養護老人ホームの待機者の多さを見て、自分の所は安心だと

思うのではなく、そのニーズに応えられないことを問題だと思わなくてはならない。』と言い聞かせています」と本井氏は言う。泰清会の取り組みを支える姿勢の根幹にあるものは、「目の前にあるニーズに対して何ができるか」という想いを、法人全体で共有する努力をしているからであろう。

topics 1

泰清会の プロジェクトの進め方

泰清会の各種の取り組みは、サンライズ港町の統括施設長でもある法人理事の本井氏が、他の幹部職員の意見を集約して、方向性を示すところから始まる。企画書、資金計画書等を作成し、それを理事会・評議員会に諮る。承認されてから、幹部会議に出席する管理職を中心に「委員会」を設けて、より具体的な企画に入り、実行に向けて動き出す。地域対策担当（民生委員・町内会等）、人事（雇用）担当、備品購入担当、各機関への届け出書類作成担当、広報担当、利用者促進担当、等それぞれが役割を担うが、その役割は初回の委員会で決定される。進捗状況はその後の委員会において随時報告し、今後の方向性を全員で確認しながら、事業開始に向けてチームアプローチ（合議）にて進めていく。

そこでは当然、メンバー同士の情報の共有と意識の共通化が求められる。委員会のメンバーにもなる幹部職員間では、常に情報交換の場を持ち連携を深めていくように心掛けている。一般職員については、進める事業の予定等を速やかに幹部職員より伝達するようにしている。具体的には、月に一度の全体研修会、週に一度の朝礼がその場にあたる。また、法人Webサイトも活用して発信している（ブログ等）。職員一人ひとりが、法人が現在、どのような方向性を意識して経営しているかを理解できるように心がけている。

取り組みがもたらした効果

「公益法人たる社会福祉法人として、社会・地域貢献活動の必要性は前から認識していました。ただし、それは利用者と地域住民に対するものであって、その地域の“街づくり”にまで関与するというイメージは持ち合わせていませんでした。我々のような福祉事業者でも、町の活性化につながる貢献ができるということを知りました」と本井氏は語る。泰清会の取り組みによって商店街に活気が戻りつつあるとはいえ、それで商店街の売上げが伸びたかと言えば必ずしもそうではない。しかし、当時はあまり先例がなかった中心市街地の医療・福祉の拠点としての街づくりは、地元の人々、特に商店街の店主らや周辺住民からは大変喜ばれている。店主の高齢化が進み、打つ手をもたず、廃れるままだになっていた商店街に人通りが増え、子どもたちの声が聞こえるようになったことは、画期的な変化と言えるだろう。

人通りが戻ってきたことは、地域の環境整備を進める効果をもたらしした。老朽化が進み、台風や強風、地震などの災害時に危険な状況が心配されていたアーケードを三原市が撤去した。段差をなくし、道路を滑りにくくする、車のスピードが出ないよう交通安全対策を施すなどのバリアフリー化が、現在進められているところである。

郵便局移転後の跡地利用のためのケアハウスの開設は、最初は三原市中心市街地における「点」の取り組みに過ぎなかった。それが、周辺のビルの有効活用、そこでの保育所等の開設、そしてさんさん土曜市をはじめとした各種イベントの開催により、徐々に地域に広がりを持ち始めた。関係機関との接点も増え、「点」での活動が「面」となっていった。その過程で、多世代の住民も集うようになり、そこに深さも加わるようになった。シャッター通り商店街に活

気を取り戻す多世代が集い交流する街づくりへの取り組みは、現在も進行中である。

topics 2

「新たな高齢者の 住まい作りへの取り組み」

泰清会が初めて手がけた事業は、山懐に抱かれた三原市郊外で開設した特別養護老人ホームであった（平成11年開設）。あわせてケアハウスや訪問介護、通所介護等の事業を展開していた。それから5年後、その地域から出て手がけた最初の施設が、中心市街地に位置するケアハウスであった。これを機に、利便性の高く賑やかな街中で暮らしたいという高齢者のニーズが想像以上に多いことを、思いがけず知ることができた。また、街づくりにも参画することで、高齢者住宅の新しい形や地域の幅広いニーズが見えてきた。

その商店街での取り組みの経験を活かして、泰清会は現在、また新たな高齢者の住まい作りに取り組んでいる。それはJR三原駅から徒歩約8分、サンライズ港町からも徒歩約5分の場所に位置する三原市役所前に建設中の「サンライズマリン瀬戸」である。平成22年度の国土交通省による「高齢者等居住安定化推進事業」に応募し、選定されたものである。周囲には総合病院やショッピングセンターもあり、利便性は高い。施設は12階建て、地域密着型小規模特別養護老人ホーム、介護型の適合高齢者専用賃貸住宅、デイサービスセンター、認可保育所等が中に開設される。建物は土地オーナーが建設し、運営管理を泰清会が行う。完成予定は平成23年11月である。

「泰清会の経験と利用者の声を集約した三原市における高齢者施設、住宅の集大成です。これが完成すれば、三原市で不足しているケアを要する高齢者への住まいの場を提供したい、という法人としての想い（目標）は、量

の面ではとりあえず達成できるかもしれません」と本井氏は言う。

今後の課題

①地域のケアを要する高齢者へのニーズに応じた住まいの提供

サンライズマリン瀬戸の建設や、グループホームと小規模多機能型居宅介護事業をミックスさせた施設を複数展開することで、三原市内のケアを要する高齢者の住まいの提供については、当法人としてできる取り組みの目標を達成しつつある。

ただし、数を揃えればそれで全て解決、ということにはならない。サンライズ港町の経営を通して、利便性が高く賑わいがある中心市街地への居住ニーズは高いことが分かったが、そのニーズが全てではない。「今住んでいる場所からなるべく離れたくない」という希望が強いはずで、郊外に居住している方のなかには郊外にある施設への入居を希望する方がいるだろう。利便性のみで市街地への住まいの場の拡大を進めるのではなく、山間部等の郊外にある特別養護老人ホーム等を拠点とし、これからケアを要する高齢者の住まいを都市部以外でも確保していく必要があると考えている。

②地域のにぎわいの継続

「さんさん土曜日」での出店者が限られてきた傾向があり、出店者数の伸びも止まっている状況がある。新たな出店者の呼び込みと出店者数の確保が必要である。「さんさんシアター」については、イベント性をもたせるなど、いわゆるマンネリ感が出ないような工夫が必要である。サンライズ港町やサンライズアネックスの当法人他施設との相乗効果を生み出すことで、中心市街地のにぎわいが継続できるようにしていきたい。

③関係諸機関との連携

行政を始めとした関係機関との連携・協働の

うえでさまざまな取り組みは進めてきたものの、まだまだ不十分な面がある。実情は当法人が主体となって進めてきた取り組みが多く、関係機関の関与が薄い取り組みもある。医療・福祉の街づくりを市全体に進めていくのであれば、当法人だけの主体性ではなく、より一層関係機関との協働が必要である。

今後、地域の活性化等いわゆる「街づくり」に関する取り組みを考えている方へのアドバイス

社会福祉法人の果たすべき地域貢献はさまざまある。法律に規定されたサービスの拡充や、近い事業の実施だけではない。多くの方法がある中で何を選ぶかは、法人ができることと地域の事情を照らし合わせて決めていけば良い。当法人は、ケアを要する高齢者への住まいのサービスを広げていくことを使命と考えていたが、偶然にも街づくりに参画することになり、それを通じた地域貢献を行えた。当初の予定にはなかったが、その時点で法人ができることを考えていった結果である。ある種の臨機応変さを持ち合わせてほしい。

あわせて、何かのきっかけで目の前に自分達の力を活かせるようなチャンスが現われたら、積極的にチャレンジしていただきたい。自分たちで考え、自分たちで動く、それが結果として、周囲を巻き込み大きな力になっていく。周囲の意見には当然耳を傾けながらも、走りながら考える姿勢で良いのではなかろうか。



さんさん土曜日